

狩猟と獣害

対策ボランティア
アは早稲田大学

グローバルエデュケーションセンターが2017年度秋学期に開講した授業です。都会に住む学生ではなかなか知りえない「狩猟」と「獣害」の現状を、二回の合宿を通して文字通り“体感”していく内容となっています。メディアを通してでは分からない“生”の世界を刺激的に楽しく学べるができるということで学生から人気の授業です。今回は当授業の1回目を記念して2017年度に行われた二つの合宿をいくつかのトピックに分けてまとめました。この冊子を読むことで、あなたの「狩猟」と「獣害」への興味が少しでも増えていただければ光栄です。

狩猟と獣害対策 ボランティア



〈庄司さん〉

猟師歴45年の大ベテラン 庄司さんに聞く！

庄司武雄さん…今回の授業で、宿から、実際の猟の見学、獣害の説明に至るまで様々お世話になった猟師さん。猟師歴は45年の大ベテランである。

○狩猟をする上で大変なことは？

非常に色々あります。一番困るのは、犬がいなくなっちゃった時ですかね。とにかくセンターは犬次第ですから、犬をうまく使いこなせるかどうか、それによって決まります。犬無しでやる人もいますけど、やっぱり犬がいなくなったら面白くないです。

○楽しいことは？

それはやっぱり素晴らしいのを捕まえた時ですね。例えばイノシシだったら、うりぼうを捕まえて嬉しくないです。この時期なら60キロから70キロくらいのメスを捕まえられれば嬉しいですね。中には150キロくらいのやつもいますけど、役に立たないからね。肉が固すぎ。

○初めて獲物を仕留めた時のこと覚えてますか？

覚えてます。いやあ嬉しかったですよー当時まだイノシシはいないし、シカもほとんどいなかったから、ウサギを主にターゲットにしました。苗木や葉っぱなんかを食べて歩いてやうんですね。おそらく20年、25年くらいはうさぎ撃ちでした。だから初めて鹿のつかいの現れた時はびっくりしました。おかげで安全装置外すの忘れて、引き金を何度引いても撃てないなと思ってるうちに逃げられました(笑)

○庄司さんにとってプロハンターとは？

私は準プロくらいです。このあたりでも一番捕まえてはいますが、まだプロじゃない。

○なぜ自分はプロじゃないと思うのですか？

相手の方が上だなと思うから。常々思ってます。俺より動物の方が頭がいい。身体能力も五感も相手の方が圧倒的に上ですからね。それでも捕まえられるかどうかは犬次第になっちゃうんです。いい犬を持っていればそれでも8割くらい捕まえられる。俺なんか7割くらいだからまだ準です。それにこの頃、足が衰えてきたからね。技術的には上がってきたと思うけども、動く速度が遅くなってるから、やっぱり若い者の方が有利ですよ。射撃だって若い者の方がよく当たります。ただ、射撃場に行つて「すこく当たるな」と思った子に射手を頼んでも、実物を撃たせるとほとんど外れます。獲物を見て撃つちゃうから鉄砲は違う方を向いているんです。やっぱり経験です。落ち着いてやれるかどうかの差です。

○一人前のハンターになるのにどれくらいの時間がかかりますか？

どれくらい精を出してやるか。それによつて全然違います。年に2、3回しかやらなかったら何年やってもものになりません。もちろん、教えてもらうためにいい仲間を見つけないといけない。単独でやったら10倍大変ですよ。それこそ10年経ても一人前にならないんじゃないかな。やっぱりいい相手を選んでご指導いただくことです。

ポレポレハンター岩田さんへの濃密インタビュー

岩田英二さん…東京での仕事を辞めて6年前から2地域拠点生活をしている移住者。鴨川で農業をしつつ、週末は東京の家族の元へ。自分で建てた家を「ポレポレ」と名付けて、都市農村交流の拠点にすることを目指している。自分の田畑がイノシシに荒らされた経験をきっかけに狩猟免許を取得。授業の現地活動を補助してくれた。

○狩猟に興味をもったきっかけはなんですか？

自分の田んぼと畑を荒らされたこと。自給のための農業もできない状況をどうにかしたいという想いと、自分の畑を荒らしたイノシシに対して、「俺の米を食ったイノシシを俺が食ってやる」という想いがあった。

○農業に興味をもったきっかけはなんですか？

以前から自給したいと思っていて、畜産系の大学出身だったこともあり農業の基礎知識はあったし、アウトドアが好きで、東京の新宿という大都市出身でもあるため、田舎に對しての憧れのようなものもあった。

○取得している狩猟免許はなんですか？
農免許のみ。

○狩猟（猟師）デビューはいつですか？

農免許を取ったのは2年前だが、実際にデビューしたのは今年。この2年間は庄司さんに付いて見学していた。

○現在までに獲った獲物の数は？

まだゼロ。やっぱり難しい。罠をしかけるにしても、動物が通るかどうかを足跡などから読むには経験が必要。

○狩猟の楽しさを教えてください。

この先、初めての獲物を獲る楽しみ。獲った獲物でBBQをしたい。

○これからどのように狩猟を続けていきたいですか？

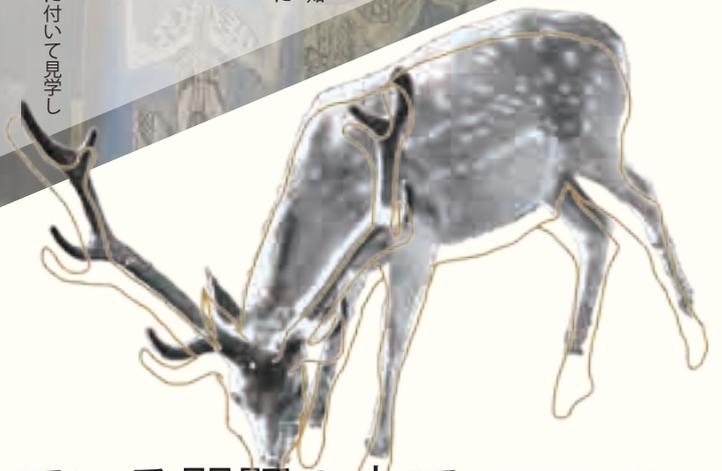
肉を手に入れるというよりも、獣害対策に重点をおいて進めていきたい。動物と人間の共存、人間の圧力の復活、人間と動物にとってwin-winの関係を目指す。具体的には、罠や柵の設置、草刈りをして耕作放棄地をなくすといったことをできる範囲でやっていきたい。

○これから農業や狩猟を始めようとしている若者に、田舎生活を勧めようと思いませんか？

基本的には勧めたい。地方や田舎は仕事がないと思っている人が多いかもしれないけど、内容を選ばなければ仕事はある。介護とか建築業とかね。それがやりたい仕事かどうかということ。それに、農業で食べていくには色々必要だけど、不可能ではないと思っている。むしろ、逆にチャンスだとも思っていて。今は後継者も不足しているし、ライスセンターのような高価な施設も空いていたりする。これはもったいないことだし、人と人がつながれば施設の利用も可能になるんじゃないかと考えている。

○この先やりたいことを教えてください。

自分が色々なことを試してみたい（竹炭の利用や様々な作物の栽培など）、データを蓄積していきたい。そのデータは、「これは初心者にもオススメ」「これは大変」といったようにまとめ、移住を考えていたり興味があったりする若者に提供して、彼らの参考になればと考えている。



狩猟が直面している問題の中で、人と自然との関係について考えさせられる

問題があったため紹介したい。その問題とは罠の規制が厳しすぎるということである。狩猟においてくり罠（地面に埋め込むタイプの罠）を使用する際、その大きさは15cm以下と法律で決められているが、実際はその程度の大きさの罠だと獲物がかかる確率が大きく下がってしまう。また、全てのタイプの罠は一度に30個までしか仕掛けられないと決められているが、これほどの罠の量では狩猟範囲をカバーできない。罠に関する規制が厳しすぎて、狩猟の実情とマッチしていないのだ。

ではなぜ実情に合わない規制がなされているのか？その原因は罠に関する規制を立案施行している機関が環境省だということにある。そのためどうしても「保護」という観点から成された政策が行われてしまう。先ほどの問題に関して言えば、クマなどの大型動物がかからないようにくり罠は15cm以下とし、野生動物を捕獲しすぎないように1度に仕掛けられる罠は30個までという規制をとっているのだ。

現行の制度では狩猟を行う上で問題が生じてしまっているという意識や視点をもって、もう一度罠規制を見直してみよう。

狩猟 × 保護 × 獣害

狩猟道具には大きく分けて銃と罠の2種類があり、それぞれに免許を必要とする。熟練のハンターによく用いられる銃は、殺傷能力が高い反面、取り扱いも難しく、また免許の取得も容易ではない。これに対して、罠は殺傷能力こそないものの、取り扱い、免許の取得ともに簡単で、初心者向けの道具である。本記事では、そんな罠の中からくくり罠と箱罠を取り上げて説明する。

【くくり罠】

くくり罠とは、筒状の本体にワイヤーロープが巻きついた構造をしており、獲物が本体を踏むとワイヤーロープが獲物の足に巻きつく仕組みになっている。

くくり罠は、他の罠と比べ、小型で軽いため設置や撤去が容易にできる上、価格が一個4000円～5000円程度と安価である。しかし、獲物を罠にかけるためには、シカやイノシシが足を置くであろう場所に罠を仕掛ける必要があるため、設置場所の選定には熟練が必要となる。

【箱罠】

箱罠とは、檻のような形状をしている罠のことである。まず檻の中に餌を入れ、戸を開けておくことで獲物を檻の中に誘引する。誘引された獲物が餌を食べているうちに作動装置に触れると戸が閉まり、獲物を閉じ込めるという仕組みである。作動装置には、檻内部のワイヤーが下にひかれると扉が落ちる「蹴り糸式」や、檻の床に設置された板が踏まれると扉が落ちる「踏み板式」などがあり、多種多様である。箱罠はくくり罠に比べ高価で、設置にも労力があるが、安全性が高く、くくり罠に比べ熟練を要さないため初心者向きである。



罠 猟



CREDIT

lecturer: 岩井雪乃

instructor: 庄司武雄、岩田英二

writer: 長沼美帆、木内萌、井澤謙

一、住近勇輝、西澤彩香、井上直斗

designer: 高岩万紗、澤口洋平

video creator: 金子幸生、玉越

啓太、尾崎琢朗、松澤美奈子、松見

恭祐

岩井雪乃さん: 授業「狩猟と獣害対策ボランティア」の発起人である早稲田大学の教員。環境社会学の分野から獣害問題に取り組む。日本だけでなく、アフリカ・タンザニアでも、害獣となっているゾウの対策を実施している。

○先生はなぜ「狩猟と獣害対策ボランティア」を開講されたのですか？

私は大学生時代に動物生態学を専攻していて、そのころから猟師になりたいと思っていました。でも、一人前の猟師になるには、何度も猟をして経験を積まないといけない。そこで、千葉県鴨川市の猟友会に所属している庄司さんに弟子入りという形で協力をしていただきました。狩猟と獣害についての知識を深めていく中で、狩猟をもっと若い人たちに知ってもらいたい！という気持ちが湧いてきました。大学で授業を開けば、学生が狩猟について学べると同時に、私自身も経験が深められる。そういう気持ちがあったので、この授業を開講することにしました。

○なるほど…。岩井先生が狩猟に興味を持ったきっかけを教えてください。

大学院生時代での研究の一環でアフリカのタンザニアへ行きました。タンザニアでは、野生のゾウが畑を荒らす「獣害」が起きていました。

○ゾウが畑を荒らすなんて、日本では考えられないことですね。

そうですね。現地住民はどうしたら獣害をなくすことができるのか、日々対策を練っていました。獣害をなくすために狩猟が必要な現場を見て、狩猟に興味を持ち、日本でやってみようと考えました。

○先生はたくさんの「狩り」の現場を見てきたわけですが、動物が殺されることに抵抗はありませんでしたか。

動物生態学では「食物連鎖」についてよく考えます。食物連鎖によって生態系のバランスが取れていることが大切であり、生命は循環するものと考えます。そこには、個体単位での死はありふれたもので、種という大きな単位で存続ができていればよいと考えます。このような考え方を知っているのでも、私自身、死に抵抗がないのかもしれませんが、タンザニアでの経験も大きいです。人々が生きるために動物を殺すことは、タンザニアではいたって普通のことです。日常的に動物の死を見ていたので、抵抗感がなくなったのかもしれませんが、でも、自分が大切にしていたペットが死ぬのはつらいです。動物の死にはいろいろ考えさせられます。

○学生とふれあっていて思うことはありますか。

当たり前のことですが、動物を殺すことに抵抗感がある人が多いですね。日本では「死」がタブーになっている感じがします。タンザニアなどのアフリカ諸国では、「死」はとても身近で、「生」とセットになっています。ここが日本と大きく違うところです。日本では「死」に出会う機会が少ないですからね。

○先生は「わな猟免許」を取得されたとお聞きました。今後どのようにハンターとして活躍していきたいと考えていますか？

免許は取得しましたが、まだ獲物はとったことがありません。まずは一匹目を仕留めることが第一目標です。最近は新しい猟師さんとのつながりもできたので、ハンターについて研究をしたいともっています。シティーハンターとか、ルーラルハンターとか、ハンターにも色々種類があるんですよ。

○ハンターに種類があるとは知りませんでした。では、最後にこの記事を読んでいる方に、ひとことお願いします。

自分が食べている肉が、どうやってできているか知っていますか？一緒に授業を通して学び、考えていきましょう！お待ちしております。

授業の主催者、岩井先生へのロングインタビュー